

序

脊柱靱帯骨化症は、脊柱支持組織の異所性骨化を特徴とする疾患群であり、その代表である頸椎後縦靱帯骨化症（ossification of posterior longitudinal ligament：OPLL）は、1960年に月本裕国先生により剖検例としてはじめて報告された。以後、わが国を含む東アジアにおいて罹患頻度が高いことが明らかとなり、疫学、病態、診断および治療に関する研究は主としてアジアを中心に発展してきた。1975年には頸椎 OPLL が厚生省特定疾患に指定され、調査研究班が組織されたことで体系的研究が進展し、基礎から臨床にいたるまで多くの知見が蓄積されてきた。

臨床雑誌『整形外科』においても 2018 年 5 月増刊号で特集が組まれてから 8 年近く経過し、この間に画像診断技術の進歩、遺伝学的研究の深化、手術手技および周術期管理の向上など、多くの新たなエビデンスが蓄積されている。一方で靱帯骨化の詳細な発生機序はいまだ明らかではなく、自然経過、進行予測、最適な手術法選択、最適なりハビリテーションについて未解決の課題も少なくない。また術後に残存する痛みに対する治療も今後改善が必要なトピックの一つである。

本号「脊柱靱帯骨化症 up-to-date」では OPLL の基礎的研究の最新知見に加え、靱帯骨化症の画像解析、頸椎 OPLL および胸椎黄色靱帯骨化症（OYL, OLF）の臨床、難治例の多い胸椎 OPLL の手術療法、術後に残存する痛みや人工知能（AI）を用いた予後予測、ロボットリハビリテーションなど多岐にわたる投稿をいただいている。さらに骨化症候群の一部とも考えられる、びまん性特発性骨増殖症（DISH）についても多数の論文を掲載することができた。本号が、靱帯骨化症治療・研究の現状と今後の展望を整理する契機となり、さらには靱帯骨化症で苦しむ患者さんの真の治療成績向上につながれば幸いである。

2026 年 4 月

東京科学大学 整形外科

吉井俊貴